

第9回大学教育研究セミナー

学問教育共同体としての大学におけるFDのあり方

—国際的文脈の中でのSoTL(Scholarship of Teaching and Learning)の取り組みから学ぶ—

高等教育の世界で教育の質保証を図るための取り組みとして、教育改善が様々な形で行われています。ファカルティ・ディベロップメント（以下、FD）とか教育開発(Educational Development)と呼ばれる取り組みはわが国の高等教育政策でもその推進が強調され、すでに本学でも定着しています。

他方、FDのための活動が広がるにつれて、FD疲れと揶揄されるような状況が現実化することに対する危惧も生じてきています。FD栄えて教育滅ぶ、というようなことになってはいけません。FDが何のための活動なのかという根本的な問い直しも始まっていますが、その際にぜひヒントにしたいのが、1990年代初めに米国カーネギー教育振興財団のボイヤー所長が提唱した、「4つの学識」論です。ボイヤーはそのうちのひとつとして、「教育の学識」を挙げており、その考えに共鳴して発展したFDの理論と実践がSoTLです。SoTLは大学が知的共同体として持続発展していくためのFD論です。

このたび、米英の大学教育を熟知し、国際的に高等教育の改革・改善のためにコンサルタントとして活躍しておられるダンドレア氏が、経済協力開発機構(OECD)の調査プロジェクトの一員で来日されたのを機に、本学に招き、SoTLとそれをめぐる国際的な動向についてお話しをうかがいます。

第9回 大学教育研究セミナー

日時：2011年4月11日（月）午後3時から5時

場所：学術情報総合センター1階文化交流室

講演：バニータ・ダンドレア(Vaneeta D'Andrea)氏

演題：SoTL in an International Context as a Strategy for Educational Development

言語：英語（簡易日本語通訳あり）

*バニータ・ダンドレア氏のプロフィール

ロンドン芸術大学(University of the Arts London, Central St Martin's College of Art & Design)名誉教授。国際高等教育コンサルタントとして20年以上にわたり活躍。米国での大学教員経験の後、オックスフォード大学、ロンドン・シティ大学を含む英国の4つの大学で教育改革に取り組む。カーネギー・スカラーに選任される。これはカーネギー教育振興財団の高等教育プログラムの一つであるカーネギー・スカラー・プログラムにおいて、専門分野の教育に功績があることを認め、財団の研究活動と連携して、当該分野の教育のリーダーであることを顕彰する、名誉ある称号です。

専門は高等教育政策、高等教育の質保証、高等教育システムの国際比較、社会科学研究方法論。

主著に、*Building Capacity for Change in Higher Education: Research on the Scholarship of Teaching*, Research report for Higher Education Funding Council for England, published in 2007 by HEFCE
Improving Teaching and Learning: a Whole Institution Approach, Authored book, McGraw-Hill, 2005 (ISBN - 978-0335-21068)などがある。

主催：大阪市立大学大学教育研究センター

E-mail: center@rdhe.osaka-cu.ac.jp